



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 3 平成4年3月31日
 発行 日本山岳会熊本支部
 熊本市二本木3丁目3-8
 (田上敏行・方)
 電話 (096)324-1200
 編集 本田誠也・河上洋子
 印刷 印刷・上田
 南熊本5丁目

目次

・支部長随想	1	・支部役員	18
・会員随想	2	・会員消息	18
・熊本岳連回想	12	・編集後記	18
・会務報告	16		

思い出の冠帽連山

支部長 奥野正亥

昨年末、早稲田大学山岳部編の『リュックサック』を、本田さんからお借りして読む機会を得た。その中で1936～37年の「冬の小長白山脈」と、1940～41年の「再び冠帽峰へ」の2編は、殊に丹念に読みかえした。私の頭の中が忽ち60年の才月をこえて、冬の冠帽連山に立戻ったことは言うまでもない。その冬京城帝大（以下、城大という）の山岳部も冠帽連山を目指していたのである。私は飯山達雄氏と共に学外から参加していた。

早稲田隊が、冠帽連山南端の机山峰 2,272 m から南尾根を縦走して主峰を往復するという、正統的な計画であるのに対して、城大隊は未踏の民幕谷を詰め、雲嶺 2,340 m をこえて主峰へ縦走するという、野心的とも云える計画であった。1936年のその当時、民幕谷はまだ手付かずで残されており、相当な悪場が予想され、恐らくは氷結した冬期以外にルートは採れないのではないかと考えられていた。

困難必至との思いに、却って隊員の登高意欲は高まっていた。城大隊はこの1年、前年の済州島ハルラサンでの遭難事故のため、泉靖一氏にかわって伊藤武男氏がリーダーになっていた。両氏共、城大山岳部を創設し育てあげた根っからのリーダーであった。伊藤リーダーと私は、2日早く先発して人夫等の手配をすませ、甬上洞で本隊を迎えた。凍結した甬老川を遡行して、民幕谷の吐合いにB.C.を設営した。翌朝、リーダーと2人先発して谷に入ったが、予想通りの狭谷である。渓流が凍結していなければ、さぞかし面倒だろうと思われる悪場の連続で、大小の滝場は完全に氷化して、本格的なアイスワークができると、一応は喜んだものの、ピッケルと8本爪のアイゼンだけでは、技術的にも困難であった。問題はあったが、私達は高度差1,300 m の薄暗い峡谷を、丸3日かかって抜け出し、雲嶺の頂きに立った。素晴らしい眺望が私達を迎え、谷底の氷雪地獄の労苦をねぎらってく

れた。それから2日後に、冠帽主峰 2,541 m の山頂に立つことができた。

私にとって初めての冬山であり、而も初ルートからの登頂に成功したことは、大きな喜びであった。私は東側の急斜面を見下して立ち、涙の出るような感動を押さえることができなかった。この時の体験から、私は山に対して強く自得するものがあった。これ以後私の登山は始まったと、今でも思っている。第2次早大隊の遠征、「再び冠帽峰へ」と前後した私の山行については、後日を期したいと考えている。後日談になるが、伊藤リーダーは軍医中尉として、北満州で陣没した。また泉靖一氏については周知の通りである。即ち戦後は東大に文化人類学教室をつくり、アンデス調査団を指揮して、ペルーで南米最古の文明遺跡発掘に成功した。その功績により、ペルー政府から勲章を贈られたが、惜しくも1970年、55才で客死した。

そのコトシユ遺跡がある現地のワヌコ市では、彼の功績を永久にたたえるため、街路の一つをセイイチ・イズミ通りと名付けたという。

※ 外国山名辞典・三省堂刊より

1936年12月～37年1月に、伊藤武男ほか京城帝大山の会と、泉靖一、竹中要、飯山達雄、奥野正亥ほか3名が民幕谷より冠帽峰に冬期初登頂。1939年12月～40年1月に、奥野正亥、渡辺泰造、伊藤たまきが渡正山から冠帽連山を経て、延水面に出る縦走を行った。

会 員 随 想

霧 島 の 自 然

石 井 久 夫

最近、火山活動が盛んになり、立入禁止となった新燃岳 1,420 m をはじめ、主峰の韓国岳 1,700 m、神話で名高い高千穂峰 1,574 m

などの秀峰が並ぶ霧島山系は、日本で初めての国立公園である。大小25の火山が集まって『緑のお月さま』とも呼ばれる自然の火山博物館さながらであり、完全な形の火口湖も沢山残っている。それは霧島48池ともいわれ、エメラルド色の水面を見せる新燃池、農業用水に利用されている大幡池、韓国岳を背景に美しい景観の六観音御池、冬期は天然のスケート場になる白紫池など、枚挙にいとまがない。霧島の四季は春からはじまる。

春一番が訪れると、山々の樹木や草木が一斉に芽ぶき花を咲かせる。6月の雨期をむかえると雨をたっぷり吸って霧島特有の自然が出来あがる。霧の島と呼ばれる位だから、昔から霧の名所として知られた所で、年平均4,500 mmもの降雨があり、独特の自然景観を形づくっている。秋には山頂より紅葉前線が降り、山麓に達する頃は頂上に冬が来て、樹氷の海となるなど四季の変化が素晴らしい。日本列島の南端に位置していながら、標高1,700 mにも達するために、暖帯から温帯まで変化に富んだ植物相がある。はげしい火山活動の繰返しで厳しい環境が作られ、それまで分布していた植物が絶滅して、新しい環境に適応した新種が分化し、霧島にだけしか見られない植物が作りあげられた。ノカイドウ、キリシマミズキ、キリシマグミ、ミヤマキリシマなどがその分化種だと思われる。主な植生として、照葉樹であるタブ、スダジイ、カシの林があり、温帯樹としてモミ、ツガ、アカマツ林。落葉樹としてブナ、ミズナラの林や、ミヤマキリシマの低木林があり、火山ガスの影響で各所に草原が分布している。この草原に生えるススキが、秋になるとエビ色に染まる赤化現象で、『えびの』という地名が生れたと言う。これは秋冷のためススキの体内にあるアントシアンと色素が急に増えて、その色素が酸性条件下で鮮やかになる性質から、高原内の噴気孔から出る亜硫酸ガスの影

響で土壌が酸性化し、ガス自体もススキに附着して鮮やかなエビ色に変色するものである。火山活動と関連して適応しているのが、霧島を代表する花・ミヤマキリシマである。ヤマツツジから変化したものだといわれ、標高700 m以上の陽当りの良い場所に群落をつくり、土壌が肥沃になり草原が森林化すると絶滅するのではないかと考えられている位、火山と切り離すことができないものである。九州では雲仙、九重、阿蘇などの同様の環境の所に分布している。

溪流沿いの道では、国の天然記念物に指定されているノカイドウが見られ、約500本位が生育して、春にはリンゴの花そっくりの白い花を咲かせ、秋には大豆粒ほどの実をつける。保護されてはいるものの、幼木の生える環境が悪化して将来に不安が残る。

霧島には先ほど挙げたものの外にも、霧島で最初に発見されたものや、霧島の名を冠した植物が多い。キリシマヒゴタイ、キリシマノガリヤス、キリシマタヌキノショクダイなど沢山ある。このように多種の植物が豊富に分布している霧島には、当然のことながらその豊富な植生に育てられている動物や昆虫などの種類も多い。植物同様に昆虫にも霧島だけの固有種があり、有名なものとしてはキリシマミドリシジミがある。余りにも美しい成虫は、心ない蝶マニヤにねらわれ、現在は殆ど人目につかない。これはアカガシ、ウラジロガシを主食とする蝶で、7月中旬より8月上旬にかけて活動するが、原生林などの限定された場所に生息するため、伐採等により絶滅状態に追込まれているのは残念である。その外にもキリシマシリウゲとかキリシマチビカミキリなど、霧島の名を冠した種類が多く生息している。しかし鳥や動物には霧島特有のものはない。特に鳥類は分布が広域にわたるために、通常日本に産する種類と同じであるが、数が少なくなったヤイロチョウが、夏期

に原生林へ飛来する。昨年9月に、ホオジロの仮親でのカッコウの繁殖が観察され話題になった。

豊かな自然に恵まれ、移り変わる四季の景観が素晴らしい霧島には、多くの登山者をひきつけるコースが開られている。もっともポピュラーな縦走コースは、えびの高原を起点として韓国、獅子戸、新燃、中岳から高千穂河原に至るもので、全行程約5時間、視界を遮るものがなく360度の展望を楽しみながら歩くことができる。高千穂河原から、時間と体力に余裕があれば、更に豊峰・高千穂峰を目指してもよい。霧島の自然を心ゆくまで探勝することにより、人と動物と森との調和、共存を考え自然保護、自然愛の心を育ててもらいたいと願っている。現実には自然林の伐採がすすみ、スギ、ヒノキの人工林に変わり環境変化が著しい。自然環境に適応して生活している生物が、人工的な圧力でそのバランスを崩され、減少方向にあるのはまことに残念である。

熊本アルコウ会



和仁古 昇

熊本アルコウ会について、書いてくれとの要請がありましたので、一寸申し述べてみたいと思います。そもそも熊本アルコウ会が創設されたのは、昭和8年7月ですから、今より凡そ60年程前になります。その当時はまだ今のような歩け歩け運動など全然なかった時代でした。学校や大企業の運動部などに、組織的なスポーツ活動の動きはありましたが、多くの庶民にとってスポーツは見る楽しみはあっても、自分でやることなど殆んどできなかった時代のように思われます。

既に故人となられましたが、飯星良弼という方が熊本アルコウ会を創設されたのです。

たいへんに先見の明のある人で、自分で運動する機会のなかった一般庶民を対象として、歩け歩け運動のための会をつくられた訳です。爾来60年、来年7月には創立60周年記念式典をやるところまで続いて参りました。

『大自然の淳朴と清爽を求めて、心ゆくまであそびましょ』というのが、会創立時からの標語です。また会のシンボルマーク(記章)は、表記の通りですが、皆が手をつないで歩く姿は、そのまゝ会の指導方針『和』を現わしています。このほかに『会歌』もありますが、若い人が少なくなった現在はあまり唱うこともありません。現在の会員数は、3,028人ですが、実動は約400名位です。

毎月、一般例会とひまわり例会を実施しています。一般例会は1日の行程約8~16Km、中高年会員のひまわり例会は8Km以下のやさしいコースというようにしています。平成3年12月末現在で、一般例会は延べ724回、ひまわり例会は288回となっています。以前は一般例会の方が参加者数は多かったのですが今ではひまわり例会が会員の高齢化を反映してか、断然多くなって参りました。

入会と同時に、夫々の会員番号が決まり、その後の事務処理はすべて、その番号によってなされることとなります。以前、一般例会の参加者が多かった頃は、バス2台使っても足りないこともありました。たいへんな盛況の時代もありましたが、最近次第に参加者数が減少傾向にあります。そのため会の運営担当者の悩みは、なんとかして元の盛況に戻したいものと、苦慮しているところです。以上簡略ですが会の紹介と近況を申し述べましたが、現在日本山岳会熊本支部に加入している、熊本アルコウ会の会員は次の通りです。宮崎豊喜、和仁古昇、西沢健一、門脇愛子、菊池更生、鶴田佐知子、加藤稜子、吉田恒子、宮崎守、深堀弘泰 計10名

(平成3年・一般例会実施表)

1月	総会(菊池国際ホテル)	130名
2月	雷山955m(背振山地)	39名
3月	老岳586m(天草上島)	51名
4月	市房山1,722m	35名
5月	九州脊梁・三方山1,578m 天主山1,494m	31名
6月	祖母山1,757m	35名
7月	桐ヶ岳997m	33名
8月	八方ヶ岳1,052m	28名
9月	矢護山935m(阿蘇外輪)	49名
10月	久住山1,787m	42名
11月	八峰山574m	34名
12月	金峰山665m清掃登山	103名

(平成3年・ひまわり例会実施表)

1月	総会(菊池国際ホテル)	
2月	北岡自然公園(熊本市)	63名
3月	立田山151m、武蔵塚公園	78名
4月	わらび狩(阿蘇栃木原)	70名
5月	河内山363m	64名
6月	住吉神社(宇土市)	41名
7月	菊池水源	70名
8月	矢部町周辺	64名
9月	飯田山431m	44名
10月	阿蘇・二束牧	53名
11月	龍峰山517m	61名
12月	金峰山665m清掃登山	

※ 和仁古昇氏は熊本アルコウ会会長

ガウリシャンカール トレッキング

門脇愛子

平成3年4月27日から、5月5日までの9日間、還暦記念として初めてネパールヒマラヤのトレッキングに参加しました。以下はその時の日記です。

4月29日(晴) いよいよトレッキング開始の日。午前7時過ぎカトマンズを、3台のバスに分乗して出発。私達の3号車には、ア

ルパインツアーの関谷リーダーと、名古屋から来た石原夫妻、中西さん、それに福岡からの私達6名とシェルパのミタさんが乗る。ほかの2台はみな関西組。車窓の風景に飽きることなく、何回か途中の部落で停車休憩しながら、14時30分頃ハヌマンテ峠2,555 mに到着。ここでシェルパやポーター達と合流する。大きな荷物はポーターに任せ、軽装でトレッキング開始。尾根道をいきなりの急登、ペースも結構早い。2時間程で今夜の泊り場、メハレ・チャウル2,900 mに着く。早速シェルパがテントを張り、コックが夕食の準備にかかり、私達は何もすることがなく附近を散歩したり、ティを飲んだりまさに大名気分。

4月30日(晴) 5時30分に日の出、7時15分に出発。8時、チエルマギのピーク3,040 mに立つと、待望のガウリシャンカール7,146 mをはじめ、白銀のヒマラヤの峰々が一望できて感激する。ゆっくりと心ゆくまで大展望を楽しむ。その後いったん谷へ下り昼食の後再び登り、今夜のキャンプ地ゴテ・ダンダ2,850 mに着く。折り悪しく一面のガスで、期待した展望はなかった。

5月1日(晴後雨) この日が一番の大登り、大下りと予告されていたが、ビスタリ、ビスタリ(ゆっくり、ゆっくり)で調子良く歩く。シェルパがびったりついてくれて心強い。まだ早いかと言われていたシャクナゲの花も、次々に白、ピンク、赤と色とりどりの美しさであらわれ、堪能する。登りも下りも花から花へ、素晴らしい山歩きの日だった。そして今回のトレッキングの最高点、チョルドウン・ピーク3,690 mに立った。長い時間待たされたけれど、一瞬だったがガウリシャンピークを望むことができた。雨季前のこの時期としては僥倖とのこと、満足して下りにかかる。途中、雨が落ち出したと思ったら大きな霰となり、山の天気急変におどろく。今夜のキャンプはチトレ村2,300 m。トレッ

キング最後の夜とあって、シェルパやポーター達も一緒になって、ネパールの歌や踊りで賑やかに交歓。

5月2日(晴) 段々畑の道をジリ1,900 mまで1時間の下りでトレッキング終了。

街道に出ると行き交う人の数も多く、ロバの隊商や、外国人のトレッカーとも会う。ジリは車道の終点、そしてエベレスト街道の起点で道標に0 Kmと記されていた。ここではほとんどのシェルパやポーター達と別れる。

有難う、ご苦労さん、ナマステ！ 私達は9時過ぎ、また3台のバスに分乗してカトマンズへ向う。途中3回もパンクしたり、運転手の昼食で待たされたりで、ビスタリ、ビスタリ、9時間余もかかって18時20分、やっとカトマンズに帰り着いた。

心でたどる山

河上洋子

心ならずも山から遠ざかったこの3年余り山を忘れたわけではない。むしろ登らなくなって却って山への思いは深くなり、見えなかった山の姿や、そこに吹いた風、雲の流れ、樹々のたたずまい、同行者の誰彼の笑いや物言いや、殊に今はもういない仲間の一寸した癖など様々に思われる。思い出すなどと過去のことではなく、今の現実として山は日々私の中に聳えている。本屋に入ると必ず山書のコーナーを覗く。以前は精精ガイドブックや地図を購入する位だったのに、山の随想や紀行集、研究、写真集などが興味を唆る。映画も例えば『K₂』の試写会など何をおいても出かけた。今も机上にはカトマンズで買ったヒマラヤ写真集、故・山田昇さんを書いた『ヒマラヤを馳け抜けた男』、アンデスの『死のクレバス』、串田孫一さんの『もう登らない山』等々を置いて、凡凡たる日常に倦んだ時いつでも頁をあけて、山行を楽しみ或は

気を引締めている。若い頃、ひたすら山に登り倦っていた時は、歩くこと登ることのみに充実感があり、却って心は空っぽだった。『誰からも好かれる無類のいい人だったという山田昇氏は、何故日常の暮しが出来なかったのか。クレバスの深い闇に転落した絶望の中で、人は何を思うのか』等々、映画の場面もダブらせながら、『何故、人は山に登るのだろう』などと数時間を坐して、じんとしんとするのは、自分自身と向き合う様で面白い。或日、思い立って書庫（という名の物置）の隅から大きなザルを引っ張り出した。雑多に放りこんだ山行記録や写真の類い。ところが何と、その殆どが白アリに喰い荒らされて、辛うじて生き残った？ものも、ダンゴのようにくっついた写真ばかり。泣く泣く総て捨ててしまったのである。— 昨年暮れのこと — 斯くして山狂いの時代の私の記録がすっぽりと消滅して、あの数年間は白日夢となった。暫くは無念と寂しさで一杯であったが、却って今はさっぱりしている。現実の山は最早や昔の山ではないことも、鮮明に感じられる様に思う。山麓の村の変貌も併せて思われる。道を尋ねたあの村の青年も、水飲場に1株残っていた秋明菊も、竹林のえびね蘭も、皆消滅したことだろう。山の帰りに思いがけなく出会った村祭り。一緒に山靴をぬいで踊りの輪に加わったが、あの村もダムの底に沈んでしまったという。登ることだけを考えていた時は、自然環境の問題がよく見えていなかった。そんなことも今は切実に考えられ、私はまた新しい気持で山歩きをしたいと思うようになった。いつか小西政継さんが『岳人とは、一生山を離れない人のことを云うのではないか。人生の夫々の時代に、夫々の山行が出来ること……』と話されたことを思い出す。瘦せ我慢でなく、私も自分の足に合った山行をこれからも続けてゆきたいと思っている。

ネパールヒマラヤ・ トレッキング

中馬 薫 人

1963年、ヒムルン・ヒマール遠征隊に参加以来チャンスがなかったネパール・ヒマラヤに行きたいと、32年間の会社勤めに区切りをつけ、古い山仲間を誘って約1ヶ月間のトレッキングを楽しんだ。同行者は妻の一枝と古くからの友人3名の計5名。1991年の4月から5月にかけて、アンナプルナ内院とランタン・ヒマールを歩いた。

（アンナプルナ内院）

4月10日、福岡空港発。同日カトマンズに着いた。つくづく地球は狭くなったと実感する。カトマンズ空港の設備も以前に較べると立派になったと感じたが、税関を出ると夜の空気の中に、懐かしいネパールの匂いを嗅いだ。翌11日はトレッキングの準備と市内観光に費やす。12日は早朝出発、ポカラへ向う機中からヒマラヤの白銀の峰々を見て感動する。残念ながら懐かししのヒムルンヒマールは、見分けることができなかった。ポカラからバスで1時間のところから歩き始める。中国の援助で建設中という立派な道路を、大型ダンプが行き来しているのに、少々びっくりした。やがて、その道路から外れてダンプスへの山道にかかると汗が流れた。鈍った身体に急坂の登りは堪える。しかし2時間後にこの日のキャンプ地、ダンプスに着いた。雲がはれると、そこは絶好の展望台であった。アンナプルナI峰をはじめとする巨峰群と、尖鋭なマチャブチャレの雄姿に感動する。13日朝、寝袋の中で久しぶりのモーニングティを味わいながら、トレッキングにこれた喜びにひたる。今日の行程はランドルンを経て、ナヤ・サンダグまでの6時間。尾根を一つこえる。途中で建築中の家が数軒あったが、トレッカー目当

てのバツティ（茶店兼ロッジ）だと思われる。聞くとところによると、これらバツティの宿泊料は、夕食込みで30ルピーから40ルピー（1ルピーは邦貨換算約4円）とのこと。モディコーラにかかる吊橋を渡ったところが宿泊地だったが、山は見えない。14日、今日は急坂を登りチヨムロンまで約4時間の半日行程。チヨムロンは、静岡県出身の林克之さんの著書「村に灯がついた」に出てくる村だ。マチャブチャレがフィッシュテール（魚の尻尾）をあらわす。ここの標高は1,900 m。15日、モディコーラを遡りドバンへ。ラリ・グラス（ネパールの石楠花）があらわれる。雨季はジュガ（山蛭）が多そうな所だ。16日、今日はマチャブチャレB.C標高3,500 mまで、ずっと登りだ。B.Cには山小屋もあるがテントを張る。17日、最終目的地のアンナプルナB.Cへ行く。上部は積雪があるため、ポーターは残してシェルパと軽装で往復した。人類初の8,000 m峰、アンナプルナI峰は、頭上はるかに高く圧倒し、また南峰が純白の北面を、朝の光に輝やかせているのも内院ならではの眺めである。マチャブチャレもこの方角からは、変った姿を見せている。それらの山に思わず登路をなぞってしまう。

（ランタン・ヒマール）

4月25日、当初の予定通り妻の一枝と友人の1人が帰国し、残り3名でランタン谷に向った。トリスリバザールを経て、ドゥンチェまではバスの旅。しかしベトラウチを過ぎると路面が悪くなる。ドゥンチェ村はチベット系が多く、道路が開通して電灯も点いた。26日、シアプルへ向けてトリスリ河を遡る。流れを遙か下に見て高い山道に行く。またラリグラス（石楠花）に会う。27日、深いランタンコーラの谷底まで急下降し、谷沿いに樹林帯を遡り、キャンプ地のラマ・ホテルに着いた。28日、更に谷を遡ること1時間で谷は大きく広がり、まるで桃源郷のように、ピ

ンクや赤、白のグラスが咲き乱れる中を行く。さらに谷は広がり、大岩壁を背景に、草原ではヤクが草を食んでいる。ここが今日の泊り場、ランタン村であった。29日、ランタン・トレッキングの最終目的地、キャジン・ゴンパ（3,840 m）まで3時間行程を歩く。道沿いに経文を刻んだマニ石、アヤメ科の花が咲き乱れている。やがてランタン山群の中心地、キャジン・ゴンパに着いた。眼前にランタン・リルン、ガンチェンポ、ガンジャ・ラなどの大パノラマが展開する。30日、キャンプ地の裏にある4,400 mほどのピークに登る。快晴！ 素晴らしい大展望に思わず声をあげる。ランタン・リルンが雪煙をあげて高く聳えている。いつまでも飽くことなく眺めつづけていた。今回の計画はこれで終り、山よさよなら……また来るぞ……

楽しかった 1991年の山行

鶴田 佐知子

尾根歩き程度の山行しかできない私にとって、昨年は最高に楽しい1年であった。仕事の都合もあり、山行回数は少なかったものの念願のヨーロッパアルプス歩きと、ボルネオのキナバル山に登頂することができた。いづれも、よい仲間とよい天気恵まれた山行であった。ヨーロッパアルプス（スイス、フランス）は、7月中旬から2週間の日程で、ヒロオ・アート・スポーツの広吉功さんをリーダーに6名でのトレッキングツアー。ツェルマット及びシャモニーを起点として、その周辺を歩いた。ツェルマットについた翌朝、ホテルの窓からマッターホルンを見た時、あゝ私は今スイスに来ているんだなど、やっと実感が湧いた。氷雪を載いた山の美しさはもとより、3,000 mあたりに咲く、草丈2~3cmのアオ、ミズイロ、シロ、ムラサキ、ピンク、

キイロの可憐な花々。その美しさは例えようもなかった。高所順応が遅い私も、ゆっくりゆっくりとガイドや皆の足をひっぱりながら雪のブライツホルンに登ることができた。歩くにつれてマッターホルンが近くになったり離れたり、また正面や斜めからと角度を変えて眺められた。イタリヤ側に続く山々など、氷雪の山も歩いて眺めれば、さまざまな表情を見せてくれる。電車の中から眺めた花の中に、ピンクのマツムシウがかった。シャモニーでは、今回の主目的であったモンブラン登頂は断念して、高山の花を訪ねて歩き廻った。パイテイソウやキキョウの仲間、赤いリンドウ、シロやピンクのマシマの仲間、ムラサキのアブラナ科の花々、総じてピンクやアオ、ムラサキ系の花色が多い。その中をムラサキ系のリュックにシャツ、パンツの人達が歩いている。ヤナギランは何処に行っても雑草のように生い茂り、見向きもされない。私はモンブランやドリユなどの素晴らしい山岳景観をバックにして、花ばかりを写しまくった。電車やロープウェーなど、登山用の交通が発達して、3,000 mをこえる高山を身近に見ることができるのは、ヨーロッパアルプスならではである。年末に行ったボルネオは、180度趣を変えた赤道に近い熱帯雨林であった。熱帯雨林地帯のシダ類には興味があり、何度か行く機会に恵まれたが、今回は、1,800 mから4,101 mのキナバル山の頂上まで、熱帯雨林を突き抜けて、ひたすら登った。植物の好きな仲間との登山で、はじめは種類の多いウツボカズラの仲間やシャクナゲ類、ヒカゲヘゴ、ヤブレガサウラボシなど大きなシダ類を見ながら歩いたが、3,300 mの山小屋に着いた時は、さすがに足はガク、ガク。翌早朝、星が輝くよい天気。ライトをつけて樹林帯を抜け、大きな岩盤の上を牛の歩みより遅く、ゆっくり、ゆっくり登り、4時間かけて一番最後にローズピークについた。山頂

部は凄い岩峰の重なり、岩盤の上にくつも岩山を積み重ねたようなキナバル山の印象であった。しかし、山麓一帯の華やいだ自然の美しさを見るにつけても、40数年以上も昔にあの戦争の惨禍で12,000人も犠牲が出たとは、信じられない思いであった。下山後は、サンダカンでのオランウータン見学もあり、楽しい山旅でした。

思いがけない 冠ヶ岳・俵山縦走

神谷平吉

それは昨年暮れも迫った12月22日のことである。この秋以来、近いということもあって幾度か訪れた阿蘇南外輪山系の冠ヶ岳に、その日もまた家内と2人で出かけることにした。登山口は、西原村東南部の阿蘇外輪の西麓一帯に広がる牧場入口。放牧の牛たちが外へ出ないよう牧柵をめぐらしている。僕達は、その牧柵の入口に車を止め、身支度をしていると1台の車が止まり、2人の中年の男性が降り立った。会釈を交わし尋ねてみると、初めて冠ヶ岳に登りに来たとのこと。そう言えば1人の方はリュックも靴も、いかにも真新しい。2人は足どりも軽く牧柵をこえて歩き始める。僕達は、ゆっくり身支度を終えると、その後を追うように出発した。牧場の中の車道を暫く登り、やがて冬でも緑濃い牧草地に出会うと、あとは目標のピークを目指して一直線の登り。ほんの数週間前までは、一面の冬枯れのススキ原の中ほどに広がる牧草地で、のどかに草を食んでいた赤牛の群れも、今日はその姿を見られない。草原を横切る高圧電線の鉄塔を幾つか廻り込み、やがてクマザサに覆われた小さなピークを越える。一旦樹林帯へ下るが、再び登りとなり林をぬけると、俄かに視界が開ける。急峻な小径を登りつめるとやがて山頂直下の岩稜が指呼の間に迫ってき

た。登りついた冠ヶ岳 1,154 m の山頂で、先刻の 2 人と出会った。4 人だけの山頂の憩いすっかり気心も知れて、一緒に外輪山の主稜線まで行くことになった。背丈程の深いスキを分けて、幾つものコブを上下して進む。地藏峠への分岐路に出て左へ折れ、外輪内壁に沿うルートをとる。やがて冠ヶ岳頂稜附近の樹林が馬のタテガミの様に望まれる斜面に出たところで、昼食をとる。そこから再び登り下りをくり返して進み、やがて俵山との中間点辺りに来た頃、2 人は「折角苦労して此処まで来たのだから、いっそ俵山まで行きましょうよ」という。僕達にとっては願ってもない提案ではあるが、俵山から引返すには、冬の日は余りにも短い。それに懐中電灯の準備もない……だが 2 人は事も無げに「いや、俵山峠まで迎えに来させますよ」という。リュックの中から、やおら携帯電話を取り出して何やら指示。そして、にこやかに「オー・ケイです」という。これには僕達はほんとに驚いたが、この 2 人の方との幸運なめぐり合いを、大いに喜んだ。また幾つかの険しい登り下降をくりかえし、護王峠を経て、無事に俵山 1,095 m の山頂に到着した。早々に俵山峠へ向い、午後 4 時過ぎには峠の車道に下り立つことが出来た。西原の山村に夕べが迫り、今まで歩いて来た山稜が茜色に染まる頃、僕達 4 人は迎えの車の窓から、充足した気持ちでその風景を眺めつくしていた。

霧島山の夏

神谷文子

昨年も、回数だけは 46 回ですが、主人ともども、ささやかな山歩きのみで 1 年が過ぎました。それでも思い返せば、幾つかの楽しい山行を重ねることが出来ました。夏の休みも 3 日しかとれないとあって、曾遊の霧島山を訪ねることにしました。初日は、えびの高原

から最高峰の韓国岳 1,700 m に登り、獅子戸岳の鞍部までのピストン山行。2 日目は高千穂河原から、中岳、新燃岳を経て獅子戸岳の鞍部までの逆縦走。これで縦走コースをつないだわけですが、結果的には 2 回縦走したことになります。3 日目、大浪池を訪ねて帰宅という慌しさでした。幸い天候に恵まれ、初日に韓国岳から俯瞰した大浪池、2 日目の帰路、中岳から下る道々望んだ高千穂峰の秀麗さなど、今まで幾度となく眺めていても、なお見飽きることのない自然の美しさでした。中岳山頂に登りついた頃は風が強く、さっとガスが立ちこめては消えてゆく烈しさでしたが、新燃岳へ向うゆるやかな下りの道では、女性的なまろやかな山容、豊かな緑が溢れるような高原散歩の気分で、久しぶりに休日のような充実感を心ゆくまで味わいました。新燃岳 1,421 m の山頂から、眼下に望む荒々しい火口底に淀むエメラルド・グリーンの色。風に騒ぐ漣の趣きは深く心に焼きつけられました。東側の火口縁に沿って歩きながら覗きこむと、見る角度によって色合いが移り変わるさまを、心ゆくまで楽しんだものです。幾つかの噴気孔からさかんに白い蒸気が噴出していましたが、最近になって、火山活動が始まり立入りが禁止されたことを知りました。幸運にも、その少し前のよい時に登れたことの喜びを、かみしめています。

初めてのアルプス

加藤稜子

目の前にドリユが、あのグランド・ジョラスが、そしてメール・ド・グラスが。そおっと頬をつねって見る。感覚はある。夢ではないのだ。昨夏、憧れのアルプスに 2 週間の山旅ができた。目的はアルプス最高峰モン・ブラン (4,807 m) 登頂であったが、力足らずでグーテ小屋からエギユ・デュ・グーテ頂上

まで。これは高度順化のトレーニングをして再挑戦してみたいと思っている。

そのあとの1日、メンバー7名を3グループに分けて、アルプス展望のハイキングを楽しんだ。今回モンブランに登頂した27才の若い男性を含む私達3人は、もっともポピュラーなコースを選んだ。シャモニーから一気にロープウェイで、高度差2,800mのエギュ・デュ・ミディ(3,842m)へ上る。展望台より登れなかったモンブランの円頂を眺めて、些か複雑な気持ちになる。それに連なる白銀の峰々の眺めに圧倒されながら、小説『銀嶺の人』や、今井通子さんのことなどが頭の中をよぎる。ここはモンブラン3山の一つ、モンブラン・デュ・タキュルの登山口になっていて、ガイドさんや観光客などで混雑していた。遙か下方には色とりどりのテント群が、雪の上に花片を撒き散らしたよう。十分にアルプス展望を楽しんだあと、ロープウェイで中間駅まで下り、ハイキング開始。朝露を含んだ花々は、まだお目覚めではない様子だったが朝日の輝きと共に少しづつ頭をもたげたり、開いたり。名も知らぬ草花が足の踏場もないくらいだ。あっ、この花は岩菊かナ、デージー。レンゲ草の原種では、ベンケイ草の仲間かナ……等々。日本で見掛ける花に出会った時は、久しぶりで知人に会ったような気がした。チリン、チリンとのどかに響く鈴の音はアルプを移動する山羊の群れ。ゆっくり歩く私達の横を、日本人観光客が急ぎ足で追い抜いて行く。何であんなにいそぐのだろう。行き合う人達とはポンジュールと挨拶を交わす。女性のレオタード姿にギョッとする。こちらでは普通なのだろうか。却って私達の長袖に長パンツ、深々と帽子を被ったいでたちに、珍らしげに振り返えられることがしばしば。甘い香りのアルペンローゼが山一面に広がる。丁度、九重山群の平治岳がミヤマキリシマの群落で、全山ピンクに染まるように……。ツ

ツジのようであり、沈丁花に似た、いわゆるアルペンローゼである。広吉リーダーに教えてもらいながら、百花繚乱のお花畑を歩き、登る。突然、眼前に聳え立つドリユ、そしてその奥にグランドジョラス。眼下に悠久の時を刻むメル・ド・グラス氷河の流れ。周囲をかこむ白い針峰群、息を呑む山岳景観の出現であった。やゝあって我にかえった時、傍らにこの崇高な大自然の眺めを共有し、そして語り合う友がいることの幸せを噛み締めた。既に半才を過ぎた今もなお、初めてのアルプスはその隅々まで、鮮明な印象を私に残している。

山 径

深 堀 弘 泰

先日、久留米の石橋美術館でマリー・ローランサンの絵を見た。展示された143点の作品の中に、若い時に描いた風景画『森の径』があった。ローランサンといえば、パステルカラーの官能的な女性像の印象が強いが、意外にもこういう絵もあったのだ。永年の山歩きで馴染んできた土の道が、この絵の中に残っていたことに、感慨を新たにされた。その絵を発見してから、西洋美術史にも余り名前が載ることのないローランサンの一つ一つの作品を、あたたかく心を揺すられるようにして観賞したのである。山の本には、見る者を威圧するような峨々たる山の写真が、必ずといっていい程載っている。私はこれらを眺めながら、もうこんな山には登れないなどと思いき、せめてその山麓までは行きたいものなどと、取りとめもないことを考えながら頁をめくる。森の中の道はどんなにさりげない径であっても、心の温まる思いにさせられる。母に接した時のように、范洋とした温もりとでもいったらよいだろうか。齢を重ね体力の限界を知って、自分に見合う自然との触合い

が、かつては目指す山への一つの過程であっただけの径、それが今は脳裏に灼きついて離れない。やはり一番忘れ難いのは、我武者羅に登っていた若い時、北アルプスの穂高岳から北へ縦走して富山に下った径である。まだ黒部ダムがない頃だからずいぶん古い話になる。3日3晩下りに下った。そしていつも周囲は山、山の重なりであった。大好きな山に囲まれて山径がどこまでも果てしなく続いている。山男の醍醐味ともいえる径であった。その後も北アルプスの山を何度か訪れたが、高山の花の時期でもあって花に心を奪われたのか、径への思いは稀薄である。昨年、私は初めて富士山に登った。しかしこの山は登り、かつ下るだけの山であった。一木一草もない石だらけの径からは、いつも空が見え麓の景色が見えた。裸の山、登る以外にどうしようもない山という印象であった。こういう山はもう苦手になってしまった。金だけが目的であり、そして金だけで価値判断をする今の時代相に似ていなくもないな、と思いながらの山行であった。

天草・梶木岳の行者碑

長 田 光 義

梶木岳は天草下島の河浦町の東端、八代海へ突出した半島の中央部にあります。別名を女岳とも呼ばれ、標高254mの低い山です。私が住んでいる本渡市から、県道牛深線を宮野河内まで約25Km、半島東端の女岳出の集落を経由して、コンクリート舗装された農道を6.1Km登ると、山頂直下の駐車場に着きます。ここまで本渡市から丁度1時間でした。頂上へは3分足らずの登り、全く呆気ないものですが、遮るものもない好展望にほっとしました。北は宮野河内湾を隔てて竜洞山、東は広い八代海と御所浦島、獅子島、そして南は間近く産島を眺めわたすことができます。頂上

広場の中央に高さ1米くらいの、円形の石碑が立っています。碑文は一部判読できない部分もありますが、次のように書かれていました。

□治四年

宮野河内中

○ 役 行 者 年寄礼之

久玉山□□

辛末七月建立 戒誉代

建立年は碑面がはがれているので読みとれませんが、明治四年辛末（かのとひつじ）七月、と判読されます。私が最初にこの役行者碑の存在を知ったのは、観光地図によるものですが、2度目に登った時、用意して行き拓本をとりました。

役行者は役小角と言ひ、山岳修験道の祖として各地の山を開山したと伝えられる。舒明天皇6年（634）1月1日、大和の葛城山麓に生まれ、大宝元年（701）6月7日が命日とされているそうです。また寛政11年（1799）に光格天皇から『神変大菩薩』の称号を贈られ、崇拝されたとのこと。このような流れをくむ山伏達は、各地の山で修行を積み民衆にも受け入れられていたわけですが、明治5年、新政府によって解体させられたのでした。梶木岳の役行者碑も、このような動きと関連があったのかも知れません。

天草島には、この外にも行人岳が3山あり八代海をはさんで鹿児島県の長島にも1山があります。いずれも、かつて山岳修験道の修行地だったのでしょうか。天台、真言など仏教系の山岳修行の山や、権現山などの神社系の山、民間信仰の山などが数多くあり、歴史を訪ねる山歩きの興味がつきません。

※ 参考文献

日本登山史 山崎安治著（白水社）

山 伏 和歌森太郎著（中公新書）

役行者ものがたり

銭谷武平著（人文書院）

よろしくお願ひします

中 本 環

生まれは広島県の呉市、育ちは大阪です。熊本とは無関係だったのですが、昭和43年に熊本大学に赴任し、以来25年になりました。子ども二人はれうきとした熊本育ちで、熊本を故郷にしています。下の息子の方は和食の料理人でして、いつかは熊本で店を出すのが夢のようです。その節はよろしくお願ひ申します。筆がそれてしまいました。失礼。私が山登りを始めたのは高校の時、大阪から信州の山へ夏休みを中心に登っていました。近畿の山も登っていましたが、部活動というわけでもなく、今から思えば、あの若い頃に本格的にきたえておけばよかったと思います。受験勉強とスポーツは両立できないようなふんい気があの頃はあって、損したなと今もくやししく思います。

熊本に来て4年目、たしか昭和47年の春だったと思うのですが、本会の河上洋子さんとそれに太田さん……この方は昭和48年11月に阿蘇根子岳西峰から転落死されましたが……この二人の女性のお誘いをうけて、団体バスでの山行に参加したのが、山登り再開のきっかけでした。以来、ずっと続いています。思えば河上さんは山の恩人です。けれども河上さんと太田さんによって教えられたのは、山よりも川の方が大きい。ネオン川の遊泳法の恩師というところ。熊本に来るまでは全然と言っていいくらいアルコールは飲まず全国の月餅の味くらべを趣味とするような甘党でした。それが激変。当初単身赴任だった私の下宿に、学生が毎夜おしかけて来ては、焼酎やウイスキーを半ば強要する。飲んで吐き飲んで吐きのくり返しで、少しづつ体質の変化が進行したようでした。ある時誰かの紹介で河上さんと太田さん達を知り、その

酒豪ぶりにびっくり仰天。あんなに豪快な飲みっぷりの女性を見たのは始めてでした。痛快で爽やかでもありました。以来、ときお酒のお伴をして、楽しさを知るようになりました。この紙面をかりて御礼申します。河上さん、その節はありがとうございました。天上の太田さんありがとう。ところで最近、週に三回ほどジョギングをしています。足をきたえるため、山登りのためです。ジョギングを始めたのは17年前になりまして、当時酒の飲みすぎで体重がふえ過ぎ、それで始めたのでした。毎朝でしたけれど、この頃は週三回が関の山、疲れが身にたまってとれないようになってきました。これからだんだん弱っていくのかもしれませんが、身の程にしたがっての山行を楽しみたいと、心から思っています。

熊本岳連回想

本 田 誠 也

昨年、福岡支部から「戦後の九州登山史年表」をまとめたいと、熊本関係の資料を求められた。戦前は朋文堂から「九州山岳」第1輯(1936.10)第2輯(1938.1)が発行され、その中に三日月直之氏(日本山岳会永年会員)の、「九州近代登山史に対する一考察」と題する労作があり、たいへんよくまとめられている。戦後47年を過ぎた現在、福岡支部のこの試みは時宜を得たものであり、九州の登山界をリードしてきた福岡ならではの企画と、期待を寄せているところである。熊本では、1947年6月、熊本アルコウ会の呼びかけで、熊本県山岳連盟が結成された。その後、加盟団体の変遷はあったが、今日まで県内山岳団体の連合体として、中心的な活動を続けてきた。最近全国的にも岳連離れが見られ、組織を横断する小グループや、個人の活動が目立つようになった。ともあれ戦後登山史の一つの側面として、岳連の来し方をふりかえっ

てみるのも、意味のないことではないだろう。熊本岳連の創設時から初期のころ、運営に関与された当支部顧問の西沢健一氏と、1960年熊本国体開催時に、岳連理事長として大会の運営に当られた池崎浩一氏に、夫々回想を書いていただいた。当支部にはこのお二人のほかにも、かつて岳連の運営に参画した人が多い。宮崎豊喜、本田誠也、工藤文昭、大木野徳敏、松本莞爾、中村恵二、広永峻一、広吉功、阿南誠志、藤本多加志の諸氏である。初代支部長の北田正三氏は、熊本岳連の会長でもあった。

熊本岳連創設のころ

支部顧問 西 沢 健 一

熊本県山岳連盟が昭和22年6月に創立されて、以来45年が経過した。その当時を知る人の多くは、既に第一線を退き、或は故人となられている現在、私のほかに適当な方は見当たらないと思い、寄稿を承諾したが、紙面の都合で多くは書けないので、簡単に印象に残っている事柄を選んで、当時をふり願ってみたい。先ず昭和21～22年頃の県内の山岳会の動静について申し上げる。熊本では、戦前ポピュラーなハイキング団体として、庶民に親しまれていた「熊本アルコウ会」は、昭和8年7月に結成された。戦時中の昭和19年8月から20年10月の間に、一時例会を中断しただけで、戦後はいち早く再開し、徐々に会員の復帰が見られていた。「大阿蘇観光スキー倶楽部」も戦前から残っていたが、さしたる活動はなかった。昭和21年10月に、熊本市健軍の三菱熊本機器製作所内に、新しく「熊本山岳会」が誕生した。会員の大半は三菱の社員であったが、設立の趣旨から一般市民も交え、大衆山岳会として発足した。私もこの会に所属していたが、昭和23年頃から社員の大半が徐

々に、名古屋の親会社に転出し、指導的立場の人達が次々に去っていった。遂に翌24年5月に会は解散となった。そのようなことで、当時岳連のお世話をしていた私は、熊本アルコウ会へ移り、引続き岳連に関与することになった。職場の団体としては、九州配電の進相山岳会や、安田、住友、勤銀等の銀行山岳部に小規模ながら動きが見られていた。学校山岳部も同様で、ほとんどの学校がまだ山岳部を持たず、わずかに尚綱高女や第一高女に活動が見られていた。世相は漸く戦後の混乱期を脱し、庶民の中に、やっと自然へ視線が向けられ始めた頃、熊本アルコウ会がリーダーシップを取り、各山岳団体の横の連携は次第に密になり、岳連結成の機運が熟してきた。ここに至るまでアルコウ会の河野、川下、太田氏らの熱心な指導と助言によるところが大きい。岳連の結成は、九州の他県に比べて決して遅い方ではなかった。名称は「熊本山岳聯盟」で発足し、2年目に「熊本県山岳連盟」と改称して現在に至っている。結成式は昭和22年6月1日に金峰山山頂で行われた。当日はアルコウ会の例会と重なり、参加者は46名であった。私は熊本山岳会から参加したが、時折り小雨が降る山頂で、午前11時開会し各会代表の挨拶、五高山岳部からの激励祝辞に続き、河野駿郎初代委員長の「金峰山を巡る歴史」という講話があり、散会した。

因に委員長は熊本アルコウ会の河野駿郎氏、副委員長は同じくアルコウ会の川下治平氏と熊本山岳会の小島義雄氏、進相山岳会の村井清正氏が選任された。結成後初の会合は、6月19日（木曜日）に古城掘端の河野委員長宅で開かれた。以後、毎月第三木曜日を「三木会」と称して、定例的に会合を開くことになった。毎回出席者は多く、日暮時に集まり、当初は決った議題とてなく、気軽に話し合い各山岳会間の情報交換の場でもあった。お互いの隔和を第一に、友情の輪を広げることに大

変役立っていた。特に河野委員長や川下副委員長の話は、戦前経験された豊富な話題で興味深く聞いた。当時は全く素朴に自然を対象にした話ばかりで、未知への探求に好奇心を燃やしていた我々は、これら先輩の経験談を大事に、熱心に聴き入ったものであった。昭和23年以降になると、各職場にも山岳部結成の動きが見られるようになった。23年から25年にかけて、カクノ組をはじめ熊本R・C・C、熊本地方貯金局、九州配電熊本支店、九州電通局、京稜山岳会、来民山岳グループ等の山岳会が誕生し、岳連に加盟した。

次に国体登山と、県体登山について述べて見たい。現在のように制度化され、優劣を競うようになったのは少し後のことで、初期には全く模索のうちに行われた。国体競技に山岳部門が初めて参加したのは、昭和23年10月に開催された福岡大会からである。この時は最初のことでもあり、JAC自体に何をどうやったらよいか、明確な方針もなく戸惑いがあったと思う。福岡市で講演会や山岳展、山岳映画の上映等記念行事があり、一方、九重山群で記念山行が実施された。まだ選手の派遣についても厳密な基準等はなく、熊本県代表は監督に河野委員長、選手としてアルコウ会の本山永吉氏、熊本山岳会の私、カクノ組の三浦堅太郎氏、九電の上村勇氏の5名が出場した。今のように華やかな揃いのユニホームはなく、編上靴に古背広という粗末な出立で平和台の入場行進に臨んだことが、滑けいに思い出される。特に注目をひいたのは講演会で、当時八高O・Bの山稜会が手掛けていた穂高岳屏風岩正面岩壁の登攀について、石岡繁雄氏が昭和21年夏以降の記録を、また伊藤洋平氏からこの年3月の登攀について報告がなされた。早大山岳部の村木庸益氏は、ペテガリ岳冬期登山について報告された。いずれも当時の岳界にセンセーションをおこしていた話題で、若かった私はこの話に聴き入

て、興奮した気持を今もって忘れていない。九重山の方は、自由参加ということで制限はなかったが、熊本から8名参加しておりやや低調であった。

県体は当初、オープン競技でレクリエーション的な考えから、県民の誰もが参加できるようと、バスハイクを行ったこともある。即ち、昭和25年は小天へ、26年は阿蘇中岳火口へ行ったが、それが良いか悪いかは別として県民の参加は多く盛況であった。但し、27年以降は山で行っている。次に熊本R・C・Cの結成と、九州山岳連盟への加盟について。昭和23年に入ると、岳連加盟団体相互の連携が一層緊密になり、お互いの間でロッククライミングの練習が始められてきた。カクノ組の三浦堅太郎氏を中心に、熊本市島崎の石神山岩場（今は岩場の面影はない）へ、ザイルを肩に毎週通う人達が多くなってきた。私もその中の1人で、ずい分熱中したものである。石神山のルートは小さいものであったが、近くにあるため土、日曜は勿論、平日にも夕方から出かけていた。そして、その延長として阿蘇高岳北面の岩場へと足を運んでいた。こうして岩登りが盛んになると、事態はロッククライミングクラブの結成へと発展して行った。その年の7月24日に熊本R・C・Cが結成された。その頃の岩場組の集りは、段山の山田豊三郎氏宅であった。昭和25年8月に東横映画『あゝ無情』のロケが阿蘇高岳周辺で実施された。危険な岩場でのロケに、主演の早川雪州氏をサポートするため、R・C・Cのメンバーが一役買ったこともあった。九州山岳連盟への加盟は、月原俊二常務理事の要請に応じて、可成り遅れたが昭和25年6月に加盟した。会費納入を助案して会員50名の限定加入とした。九岳連との窓口は私が担当したが、任期中たいした活動はなかった。最後に付言したいことは、岳連機関誌『ザイル』の発刊である。昭和23年5月に創刊したが、

残念ながら後が続かなかった。この稿は岳連創設後、昭和25年頃までのことを書いたが、熊本アルコウ会が積極的に岳連の運営に当たっていた時期であり、その後事態は進展し、会員の意見もあって、昭和27年5月にアルコウ会は岳連を脱退した。岳連の初期は、その時点までを一つの区切りと見るべきであろう。

※ 熊本アルコウ会が正式に岳連を脱退したのは、昭和53年3月。

熊本国体のころ

池崎 浩一

『光陰矢の如し』と言うが、全く早いもので、熊本で国体（昭和35年）があってから既に32年になる。当時の国体登山は（今も同じだろうが）、開催地の岳連が準備の総てについて主導権をとらねばならなかった。従って国体競技の完遂は、県岳連にとって避けて通ることができない苦難の命題であった。目まぐるしい社会情勢の変化で、当時とは価値感も大きく変わった現在、あの頃の話など昔話になってしまったが、記憶の糸をたぐりつつ思いつくままに書いてみたい。

苦難の国体準備

国体登山競技の準備、それは本当に厄介で大変なものだった。県や日体協も指導、協力はしてくれたが、こまごましたことなど一切は、県岳連と開催地町村の仕事であった。当初は試行錯誤の連続で、開催地町村が始動を開始するまでは、不毛の折衝を続けざるを得なかった。阿蘇山でのコース選定では、幾度となく山を歩いては検討を重ねた。また情宣担当者は、膨大な資料集めに追われながら、全国に向けて3回も大会予報を発送した。プログラム編成では、関係者が夜を徹して行うこともしばしばであった。いちいち数えあげれば切りがないが、殊に大会前1ヶ月間の慌

ただしさは筆舌に盡しがたいものであった。些か手前味噌になるが、やった者でなければ解らない苦勞の連続であった。誰もが貴重な時間をさき、手弁当で頑張った。県岳連が一つの目標に向けて、あれ程まとまり燃えたのは、恐らく初めてのことであったろう。

好評だった登山競技

国体期間中は、すばらしい天気恵まれた。閉会式は阿蘇町の内牧小学校で行われた。講評の壇上に立った星野技術委員長（日本山岳協会理事）は、先ず県民あげでの歓迎に謝辞を述べられたあと、「私はこれまで、数多くの国体に出場してきたが、熊本の国体ほど優秀な出来栄は、初めてであった」と絶賛され、続いて「これは熊本県山岳連盟の周到な準備と、岳連スタッフの強力なチームワークが、かくも完璧に近い運営に導いたものであり、その努力に対して敬意を表する」と、最高の賛辞で労をねぎらわれた。国体後も県岳連には各地から、「立派な国体でした」と、感謝と労をねぎらう便りが、何通となく寄せられた。このようにみごとな評価を受けることができたのは、もとより県岳連の執念が実ったものではあるが、関係者の協力なしには成し得なかったことである。わけても阿蘇郡町村会をはじめ、地元6か町村の絶大な協力があってからである。

危なかった国体開催

国体の会場はどうして決められるのか知らないが、このことは県当局からも何の話もなかったし、誘致してくれたところもなかった。登山の場合は、会場も限定されるし、国体のことだし会場を決めさえすれば、当然関係町村は喜んで協力してくれるものと思っていた。県岳連が県体協に会場「阿蘇山」で要領を提出したのは、昭和34年3月頃だったが、この頃地元町村では、登山競技については受入れ

返上の気運が濃厚であった。理由は各町村とも既に受入種目（卓球、クレ－射撃）が決まっており、これ以上引受けることは困難ということであった。第11回兵庫大会では最後まで大丈夫と言われていながら、中止になったし、第12回静岡大会でも、一時は返上種目にあげられた前例もあったので、私たちは少なからず慌てざるを得なかった。しかし幸いなことに、今は故人になられたが、河津寅雄氏（当時、小国町長で阿蘇郡町村長会長）が熊本県山岳連盟会長であったので、その盡力により受入れてもらうことになった。8月には阿蘇郡町村会事務局に準備委員会も発足し、ことなきを得た。今にして思えば、会長が地元の名士（県政界の有力者）だったからできたことであり、表沙汰にでもなっていたら中央協会をまきこんだ騒動になっていただろう。何故敬遠されたのか、表向きは予算措置が困難ということであったが、私は登山競技の持つ特殊性を指摘したい。登山競技は他の競技のように、見て面白いものではないために、一般に関心がうすく理解し難い面がある。国体の種目に登山があることさえ知らなかった人達との交渉なので、抵抗があって当たり前である。そのことに気付かなかった我々にも、手順に甘さがあったと思っている。平成11年には、2巡目の熊本国体がやってくる。登山競技の方式も大きく変わったと聞いているが、いずれにしても開催地町村の協力なしには、やって行けないことだけは、はっきりしている。辛い体験をただけに気になるが、き憂に終われば幸いである。

会 務 報 告

◇ 春季例会（傾山 1,602 m）
 日 時 3月23日、24日
 場 所 宮崎県高千穂町「高千穂荘」
 内 容 前夜、国民宿舎「高千穂荘」に集合

懇親会。24日午前8時出発、日之影、見立經由奥村林道に入り九折越下車止め。11時半、傾山山頂着。

参加者 奥野、西沢、馬場（猛）夫妻、佐藤石井、田上、大木野、川端、鶴田、池崎、藤本、樋口夫妻 （14名）

◇ 支部委員会

日 時 4月14日 18時
 場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
 内 容 支部総会の議案検討
 出席者 奥野、本田、田上、川端 （4名）

◇ 平成3年度支部総会

日 時 5月11日 18時30分
 場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
 内 容 平成2年度事業報告、決算報告、平成3年度事業計画、予算480,000円
 役員改選、委員（工藤、中村恵、広吉、河上） 監事（樋口） 常務委員は委員会付託。平成4年度支部設立35周年記念事業として、カナディアンロッキー登山隊を派遣する。
 出席者 奥野、西沢、宮崎（豊）、中馬、田上、和仁古、大木野夫妻、菊池、中村（恵）、河上、藤木、樋口、広吉、池崎、出来田、深堀、中本（18名）

◇ 平成3年度日本山岳会通常総会

日 時 5月18日 15時
 場 所 東京都千代田区内神田、コープビル
 出席者 田上常務委員

◇ 支部委員会

日 時 5月26日 18時
 場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
 内 容 本部総会報告、総会付託常務委員の選出は、現時点では余人に替え難く田上常務委員の継続に決定する。

出席者 奥野、西沢、本田、田上、工藤、中村(恵)、広吉 (7名)

◇ 日本山岳会自然保護全国集会

日時 6月29日 13時
場所 新潟県新発田市 商工会議所ホール
出席者 石井 (101名)

◇ 夏季例会(山の映画とビールの夕べ)

日時 8月24日 19時
場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内容 神谷会員のビデオ作品「秋の石堂山山行」ほか。大木野会員の8ミリ作品「昔の例会記録」。本田会員から来年のカナダ登山計画の説明あり。
出席者 奥野、西沢、宮崎(豊)、石井、本田、中馬夫妻、田上、和仁古、門脇、大木野夫妻、藤木、鶴田、馬場(博)、神谷夫妻、吉田、池崎、藤本、出来田 (21名)

◇ 支部委員会

日時 9月24日 19時30分
場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内容 馬場博行会員提案の海外遠征計画(青蔵、西蔵高原の自転車走破とチヨユー、シシャパンマ連続登頂)の検討。福岡支部から依頼された(戦後の九州登山年表)資料について打合せた。
支部報第3号編集担当(本田、河上)カナダ登山担当(工藤、広吉)
出席者 奥野、本田、田上、工藤、中村(恵)河上、広吉、馬場(博) (8名)

◇ 秋季例会(九州背梁・烏帽子岳 1,692 m)

日時 10月19日、20日
場所 泉村樅木字八八重 民宿・山女魚荘
内容 前夜、山女魚荘に集合し懇親会。

20日8時出発、北面の五勇谷林道からモハチ谷を登る。先日の台風19号で登路が荒れ難渋したが12時30分、全員登頂した。

参加者 奥野、石井、本田、田上、樋口夫妻、大木野夫妻、藤本、中本 (10名)

◇ 第7回宮崎ウエストン祭

日時 11月3日
場所 宮崎県高千穂町五ヶ所・三秀台
出席者 奥野、本田、田上 (3名)

◇ 日本山岳会年次晩餐会

日時 12月7日 18時
場所 東京都港区高輪 新高輪プリンスホテル・国際館パミール
出席者 西沢、本田 (577名)

◇ 支部新年晩餐会

日時 平成4年1月11日 19時
場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内容 宮崎(豊)会員の乾杯で開宴、出席者より順次近況報告を兼ねてスピーチ、工藤委員から今夏のカナダ登山計画について説明あり、例年通り予定時間を大幅にこえる盛会であったが、和仁古会員の万才三唱でお開き。
出席者 奥野、西沢、馬場(猛)、宮崎(豊)、石井、本田、田上、和仁古、工藤、大木野、門脇、川端、河上、樋口夫妻、広永、神谷夫妻、加藤、吉田、矢毛石、広吉、藤本、池崎、出来田 (25名)

◇ 日本山岳会中高年登山全国大会

日時 平成4年2月22日、23日
場所 東京都 水道橋グリーンホテル
出席者 田上、河上 (2名)

◇ 春季例会 (万年山 1,140 m)

日時 3月7日、8日

場所 大分県玖珠町 万年山温泉美人の湯

内容 前夜、美人の湯集合、懇親会。翌朝日帰り組の到着を待って万年山に登る。1等三角点が置かれた最高点から、広い山頂台地の西端 1,034 m 標高点を往復する。東端のケルンで昼食後下山。

参加者 奥野、西沢、石井、本田、河上、藤木、樋口夫妻、神谷夫妻、後藤、田上、池崎、大木野夫妻 (15名)

平成3年度支部役員

支部長 奥野正亥

副支部長 本田誠也

常務委員 田上敏行

委員 工藤文昭、中村恵二、河上洋子
広吉 功

監事 樋口 格

支部顧問 西沢健一

会 員 消 息

◎ 新入会・復活会員

中本 環 10921

〒860 熊本市新町4丁目2-36

電話 (096)355-0630

中馬一枝 6352 (復活)

〒862 熊本市帯山2丁目14-33-102

電話 (096)384-2353

※中馬薫人氏との夫婦会員

◎ 退会されました。

大津省吾 4478 (4月23日)

園田道子 10242 (5月8日)

◎ 住所変更

今野善郎 8727

〒892 鹿児島市加治屋町5-6

電話 (0992)23-7285

◎ 記念切手を寄贈

本年1月、新年晩餐会の際、宮崎豊喜会員から、長年収集された記念切手(15,000円相当)を支部の通信用として寄贈された。

◎ チビッコ登山隊キナバルへ登る。

熊本県菊鹿町で「やまびこ山村塾」を開いている阿南誠志会員は、本年1月に小学生9名を引率して、マレーシアのキナバル山(4,101 m)に登った。このことは快挙として地元の新聞、テレビなどで大きく取上げられた。親元を離れた山村留学の子供達が、自然の厳しさを学び、体力・気力を養ったことが、今回の全員登頂の成果につながったと思う。阿南さんの努力に敬意を表したい。

編 集 後 記

何とか第3号発行に漕着けた。予算と紙数の兼ね合いから、心ならずも貴重な原稿の一部を間引いたり、例えば長田光義さんの折角の役行者碑の拓本も、掲載できなかった。また海外登山メモも、次回に譲ることになった。ご了承下さい。熊本の登山史の一側面としての「熊本岳連回想」は、些か意企とは異ったが、寄稿を感謝したい。本年は支部創立35周年になるが、それを記念して皆で行けるカナダの登山を計画している。多数の参加を期待しています。(本田・記)